

10 ドイツ・オーストリアにおける 日本学の現状

ペーター・パンツァー（現在はボン大学）

——私見——

今年（1989年）は毎週ウィーンで6時間、ボンで8時間とそれぞれ講義の予定がギッシリ詰まっているため、お陰様で仕事不足を嘆く余裕もなく過ごしております。去年始まった冬学期と今年始まった夏学期のため、毎週私はウィーンとボンの間、1000キロの距離を列車で往復しています。これが夜行列車でなくて、飛行機だったら何と素晴らしい事でしょうか。11—12時間も眠っていれば到着するのはウィーンやボンではなく、直行便なら日本ですから。その方がどんなにか楽しいことでしょう！

さて、私のウィーンとボンでの仕事のことでありますが、両方を比較しますと、なかなかこれは興味深いものですし、大変よい経験になります。この両大学には日本学についての長い伝統が共にあります。ウィーンでは西洋における19世紀の最も重要な日本語及び文学研究者としてのアウグスト・ピッツマイヤー（August Pfizmaier）を挙げることが出来ます。彼は1847年に柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』を独訳していますから、正に日本研究者の草分けと言えるでしょう。彼は大学での講義は数年しかしておらず（中国語）、その後は専ら自宅で研究を続けました。一方ボンでは、日本とのかかわりで19世紀の最も有名なあのシーボルト（P. F. von Siebold）がここで数年を過ごしています。50年代にはボン大学の教授職を得る機会があったのですが、彼は自由で義務に縛られる事のない立場での学究生活を望み、事務的な煩わしきや学生達との作業の為に自分の貴重な研究時間を割かれたくない、これは「馬から驢馬に乗り換えるが如き格下げ」と言って教授職を辞退しています。「時間に縛られ、聞く耳を持たない学生達を前に講義して何の得になろうか。それよりも自分の意の赴くまま自由に研究を続けた方が余程意義がある」というわけで、ピッツマイヤーもシーボルトも一生自由な学者の道を歩きました。そのためウィーン大もボン大もヨーロッパ最初の日本学講座開設という栄誉にあずかる事が出来ませんでした。

それではこれから現在の日本学研究について少しお話し致しましょう。まずは統計的な事から申しますと、過去15年間にこの科目を選択する学生の数は驚く程増えました。最初の2年間で50%からそれ以上が落ちこぼれてしまうのですが、数としてはそれでもまだまだ多く、そのため教授数もこれに伴って最近が増えて来ております。

ドイツ語圏に於ける大学での、日本学科入学者数は各大学でおよそ20—150名となっています。初学者から博士課程を含めた全課程で、私の最もよく知るウィーンとボンを例にとりますとウィーン150名、 BONは500名の学生達が在籍しています。ウィーン大は平均数

を少し上回る位ですが、ボン大の場合はドイツ国内の12の日本学科のうちではこの数は明らかにトップです。これは多分ボン大には、西独では唯一、本来の日本学コースと並んで日本語通訳・翻訳コースが設けられている為でしょう。学生数の増大に伴って、講義数・講義内容の拡大や、教室数・資料・文献量などの問題が追い駆けて来ます。しかしこれらは我々自身の処理すべき機構的な問題ですが、この他に最近とみに頭痛の種になっているのが（少なくとも私にとって）日本学そのものの本質的な問題や教科内容、また時代に即したテーマなどのことでもあります。

実際の経験から二、三お話ししたいと思います。1年ほど前のことでしたが、1人の女子学生がやって来て頼みが1つあると言いました。私は気前が良いので1つでなくても2つでもどうぞと申しましたが、彼女は初めから2つのつもりだったのです。さてその1つとは講義の時に、あるストライキの通告をさせてほしいということで、もう1つというのは当時私が担当していた日本文学史の講義の中で、女流文学・プロレタリア文学・差別問題文学などについて詳細な説明をして欲しいというものでした。どうしたものでしょう？ 講義中に告示することは許可しませんでした。講義が始まる前と終わった後では彼女の自由である、しかし私は政治的なことを講義の最中に差し挟みたくないと言いつつ渡しました。もう1つの頼み事についてですが、私には万葉集から始めて大体三島由紀夫までの日本文学入門の講義をするアカデミックな任務、言わば義務があるのです。勿論紫式部、与謝野晶子、林芙美子たちについては説明していますし、『破戒』も取り上げています。しかし1学期しかない文学史入門の講義の中で女流文学、プロレタリア文学、差別文学だけに偏るといのはどうでしょうか……。その女子学生には希望はよく考えてはみるが……というふうにだけ答えました。

ところで今日の日本学研究においては、決定的な変化というものが幾つかあります。30—50年前には日本学というものは全く明瞭かつ単純なものでした。日本学と言えば他の地域学 (Regionalfächer) も同様ですが、殆ど文学的な、言語学的な研究が主でした。そしてその資料も容易に入手出来ましたから、わざわざ日本まで行く必要もありませんでした。尤も簡単に日本に行くことも出来ませんでしたけれど。西洋にいて可能な資料から関心をそられるのは——学問的、専門的な根本的疑問として——やはり日本の宗教や哲学、思想史などです。このような伝統により今日でもドイツ各地の日本学研究の大半が哲学・文学の領域を扱っております。

勿論学問は社会や理念的状況の反映です。世紀末の頃はまだ小泉八雲との「夢見るような楽しい贅沢さ」を味わっていました。それから後の三国同盟の頃とは言えば大和魂とかその特異な源泉などについて研究したものでした。そして今日は？ と考えると日本文学は次第に後方に退けられて（それは既に十分研究されてしまったということでしょうか）政治・経済・社会等について、時のテーマとして前面に出てきてそれらが取り上げられる傾向にあるのです。

これはしかしテーマの変遷というばかりでなく、社会の風潮の変化に伴うもので、つまり批判的日本学 (Kritische Japanologie) と呼ばれる分野もあるのです。これはどういうこと

をするのでしょうか？ 日本の社会問題に取り組み、被差別（未解放）部落民やアイヌの差別といったようなテーマが中心になったり、また経済面では繁栄の陰の問題などを扱ったりします。日本史については殆ど30年代40年代の日本軍国主義のみを扱って、過去の克服がなされていないと非難しては靖国神社関連事項などを面白がって引用したりします。特に前天皇の死とその前の長かった重体の時にはこれが顕著でした。先日私はオーストリアのテレビの2時間に亘る国葬特集番組で解説を依頼されたのですが、引き受けるに当たって心配したことは10万人ほどの視聴者に対してより、正直なところ誤った説明だと非難するかもしれないほんの一握りの日本学研究者の同僚についてでした。では一体何が誤った説明とされるのでしょうか。

1年前の事、かれこれもう10年以上勤めている研究所のショウケースに教育勅語のファクシミリを出した事がありました。当時、日本の義務教育システムに関する講演をなさる先生がいらしていたので、学生達はその講演に集まるきっかけになればと思ったからです。勿論これは1945年までのみ使用されたものと書き添えておきました。この時の反応は学生達からではなくて、ある同僚からのものでした。彼はもうずっと以前からのこの禁止の品を持ち出して学生達を惑わせると、私を非難したのです。昔は学校が火事になったりすると何を措いても第一にこの文書を救い出さねばならないというものでした。彼是我々の研究所が火災になってもこの文書を救おうとは思わないと言うのです。それは当然の事ではありませんか。何故この件で彼がそんなに興奮するのかとたずねたところ日本の菊の紋章はファシズムの象徴でヒトラーのハーケンクロイツよりもっとひどいものなのだという答えでした。

当然ながらこれ以上彼とは話を続けませんでした。論理が違ってはどうしようもないことです。今日、日本はもはや疑いもなくエキゾチックな所はなくなってしまいました。日本社会の弱点は今日では充分明らかになっています。どの社会においても、それが知られていなかったか、知られていなかったかのどちらかの事なのです。問題は——西洋では当然のような事なのですが——我々が勇気をもって、名前も出して語るとき、或はまた日本人自身にその判断を任せるべきかも知れないような事を、故意にせよ、無意識にせよ、どこまでその汚点についてさらけ出すべきものなのか、ということなのです。

さて、それでは最後に締めくくりとして我々の研究分野ではその命名問題（表札）も含まれているということにも触れておきたいと思います。JAPANOLOGY 又は JAPANESE STUDIES と西洋では言うておりますが、この語には様々なニュアンスがあるでしょう。ですからその日本語訳についても様々なニュアンスがあるでしょう。ですからその日本語訳についても同じような事が言えると思います。ボン大学では「日本文化研究所」を使用していますが、ウィーン大学では3年前に「日本学研究所」と変えられました。

概念の裏には少なくともある特定のプログラムへの意図が隠されているものでしょう。言葉の使用については充分討議された筈です。しかし、まあ、これは特に重要な点ではなくて、重要なことは各自が熱心に研究することでありましょう。